

根津家藏

天
狗
草
紙
詞
書

繪卷詞書集第十三

小 引

一天狗草紙七卷の中、こゝに掲ぐるは根津家所藏一卷の詞書である。此繪卷に關しては本號圖版解説欄を参照されたい。

一 活字に移すに當つては、本文の行數字數は原本の儘にしたが、繪に挿入されたる文字は便宜上書流しに爲し、しを以て改行を示した。原本の體裁に就いては圖版第十一―十四を参照されたい。

一 缺失又は不明の文字は□を以てし、異體の假名は現今の活字體に改めた。(梅津)

詞第一段

第一紙

か様にはかなき事出来ければ
さすか天狗も岩木ならねは世の
うき事もおもひしられ身のあた
なる程もはかられて邪執をひる
かへし憍慢をたをして面々にまこ
とのころをそおしあひける三界
無安猶如火宅なれば魔宮もなを三
界の舍常有生老病死憂患なれば
天狗も是四苦の身なり嗚呼かなしき
かなやうらめしきかなや生死の大
海には度生の船筏をくつかへし菩提
の高山には増進の徑路をうしなへる
事しかしはやく愛着の餌をなけ
すて名利のくゝりをふちきりて二
無我のそらにかけり三菩提の嶺
にのほらむにはかくのことくおもひ
たちておの／＼皆所存の趣をそのへ
けるある天狗云われは淨土の教に
よりて往生の素懷をとけ侍へし
其故は末代濁世に生をうけ鈍根下
劣の身を得たり彌陀の本願は有智無

第二紙

智をもきらはす持戒破戒をもえらはす
十念をも引接し一念をも來迎す自力
修行かなはねは他力本願に乗て易行
易修の教をたのみて不退の淨利に
往生し妙法を聽聞して法性の常樂を
證せむといへり或天狗云四種三昧を修し
一心三觀をこらして分段の生をすてすて
六根清淨の仰にかなひ質尋の身をあらた
めすして四德波羅密をえむ法花經云
須臾聞之即得究竟とときて即身
成佛を龍女が玉にみかき邪正一如を
達多か證にあらはす諸佛出生の本懷衆
生頓成の直道なり於我滅度後應受持
此經是人於佛道決定無有疑とのへて
後五百歳は今法花經修行の時分なり
治生產業皆興實相不相違背と説は
魔界の憍慢天狗の凶害みな成佛の正因
とこそは開會せられたれといふ或天狗
われは花嚴三昧を修して十玄の窓の
前に普賢の滿月を詠し六相の床の上
行布の美花をもてあそはむ魔界佛
界圓融し煩惱菩提容融して杲海に
沒同せむ事三生を出へからすといひけり
或法相の大乗を學して三大僧祇の修行
におもむき或は八不の正觀を凝して
獨其畢竟の理を證せむともいへりある

第四紙

かいはく教に權あり實ありみなこれ月を
おしふる指きしにいたる筏なり言詮にいてゝ
理致にくたるされは佛成道後説云於三七日中
思惟如是事諸法空寂滅相不可以言詮我寧不
説法疾入於涅槃云としかりといへとも慈悲の故に
やむ事をえすして四十九季のあひた權實
頓漸の門をひらき半滿偏圓の教をたる
又佛寂後云始從鹿野苑終至拔提河於是二
中間未嘗説一字文説已三百六十會にいたる
一大時教は只是一箇之方便也凡五千四十八局
説道理をつくさすおほくは經教の中に
のみとこほれり佛法は言語のうへに
あらず自證自悟してまさに成佛を得へし
故世尊一枝の花をとり青蓮の御眼にてあ
まねく四衆をみ給に人よく領解するもの
なしたゝ大迦葉のみありて破顔微笑し佛旨
をみたまへり爰佛迦葉につけてのた
まはくわれに清淨の正法眼藏涅槃妙
心實相無相なり汝に付屬す汝まさに流
布して斷絶せしむる事なかれ迦葉ひとり
大法眼藏をえたまひてよりこのかた西天の
四七唐土の二三的々として相承し綿々として
たえず不立文字の宗風なれば樵夫もたち
ところに見性し直指人心の別傳なれば
山獵も忽然として發明す階梯をふま
すしてたゞちに佛地にのほるはしめより

第五紙

實法をもちて人をつなす直に本

分事をもて接す僅に心をあけて

うたかひさとりをもとむればははは

くあやまれり豈多知多解にして應

識をもて思量せむや向上の一路先聖

不傳諸宗超過の法なれば毘盧の頂上

をふむ直指の宗によりて本分をあき

らめむといひけり或天狗云いもうけ給法は

皆是三乘一乘の顯教の域眞如生滅の因

海の分なり眞言一宗は法をいへは離教説故の

性德杲海の教機をいへは離機根故の

祕密上乘の人なり自性法身の直語なれば

不立文字の遮情の談にあらず法外常

恒の法樂にして隨縁對機の理致に

もあらず山王院經を引て云十方世界如

恒河沙三世諸佛不於月輪作唵字觀得

成佛者無有是處又云今案此三摩地門唯

在此祕密自餘一切修多羅中闕而不書

故云大乘中王教中取祕法華尙不及矧

自餘教乎云々觀夫大空不生の晴天には六

大の日輪熒々として光を耀し本有金剛の

宮殿には四曼の星宿宛然としてかけを列

ぬ故禪門は生身の釋迦顯機の迦葉に

對して遮情の權法をつたへ密教は法身

の大日本有の薩埵のために表徳の實

相を談す又天台花嚴は顯の一乗にしてま

第六紙

たく一大圓教にはあらず法相三輪はなを

一心の利刀にしていまた三密の金剛をふる

はす然則眞言祕密教は諸宗取頂の教

にして上は下をかね勝は劣を攝する徳

あれは上根上智の人すみやかに

得達し重障根鈍のともからも頓

に解脱するものなりこゝをもて高麗の

人師圓通云餘教の成佛は方便引接の言

にて究竟の實談にはあらずと釋せり

智證大師は顯教行人不得成佛と判し賜

また機根をは但爲利益鈍根人と云時分

をは於末法中と宣たりしかれば三密の

行を修し五相の觀に住して成佛せむと

いひければ天狗の長老云いつれもく

貴けれとも各々になを本執を執して

我執いまたのそこらすときこえたり

所詮いつれの教にてもいそき精進に

修行してはやく我身の無常を觀

し生死の本源を達し給へといひ

ければ即面々に本所學の法によりて

閑屏の道場をしめて修行をくわた

ていそきて堂舍塔廟を建立して

事の六度を行し亦大乘經を講し

て了因の種子をうへ侍ける次聊不

密ともあひのこりければしなれし

決擇心をもちて疑胎をそ散し侍

第八紙

りけるとなん

繪第一段

第九紙

華嚴宗匠

□宗法燈

□密棟梁

天臺貫主

愛宕護太郎房

得法禪師

三論學頭

法相碩徳

三山檢校

持戒律師

念佛上人

第十紙

二 それをこそふかくたのみたてまつりてい

たれかあはれとも候へきをう

三 あはれこのみちの法燈にておはしける物を一年平

等院の一切經會に宇治橋のこほれて人のおほく死た

りと京中にひろうして人々おほくさわかせてな

く宇治へあつめたりしめいしくめつらしき事

いひいたしたりし人をあらをしや

一 すきにしころ京中を焼き侍し時火焔まりかりし

河原をとひこえて蓮華王院塔につきてやかて本堂をや

□たりしことをよくおもへは詮なきひか事をし

侍□後悔かきりなしそき□つかまつりて懺悔し侍

候はし佛淨土のちくをこそまいらせ候はむすらめ

われこそさきに置きたるぬしよ

なにとて人の木をはとるそ

あれらかのれてものもせぬに」よく下知してものせさせ給へ

——第十一紙

もちをりのし」かたのいたさよ」いつまでおつき」やらむ」

□れを御らん」かつへうとの」したるや」そや

二　さりとてはもたて」みちのゆかんするか」はやあよへや

くれたる物も」なくて人せ」かみかな

ものをくうたらはこそ」ちからもあらめ

詞第二段

問講讃の經の中に就明魔事之

相余者魔界は是三界六趣の中には

いつれの攝なりとか可云耶

佛道修行の行人墮魔界義可

有耶　答條略之此事難定處々

の説相不同也依之天台の正觀には

六趣の外に魔界の道を出せりと

可答申さてかれハ雖爲佛道修

行と人住邪見起憍慢墮魔

界ニ可申敷

難云條略之依難定兩樣致疑難

若且三界六道云諸法不過

現量世間天狗多是鴉也仍畜

生道の攝なるへし依之或經には

一切鴉皆是天狗と又若依之云余者披諸經論所の説相不定なり

或天魔と云或鬼魔等演たり

余者可互諸趣見たり　仍

——第十一紙

兩様ニ難思さてかれハ御答相

叶へり花嚴首慢嚴經等之説相に

付是難思設雖懷慢心起邪見

佛道修行之人不可墮魔界所

以者何魔界ハ是生死有漏之

果法也修出世無漏之行業豈

感魔界之果報乎是以弘決ニハ

若知衆生不出生死不慕佛

乘魔於是人觀想ト云大日經

五字陀羅尼の功能を演たり降伏

四魔解脫六趣と説き理趣經ニハ

持此寂勝教王者一切諸魔不能

壞と説けり此等の文の心を見

に佛道修行の人またく不可墮

有御答々條略之自本所答申

三界六道中には一偏に不可判攝

諸趣の中に皆有魔見たり第

六天の魔は魔界之棟梁也と云

事常途之説相也

漢書の中には天狗は流星也則

太白金精と云へり大日經の義

釋同之此等又ハ皆天衆の攝と

——第十二紙

みたり或云鬼魔云人魔云又

諸趣に互と云事を但至一切

鴉皆是天狗之文者佛說鞍馬

毘沙門經の説敷此經ハ譯者

誰人そや不可爲指南但會申此

文鴉是天狗の所乘也例如神

明陀巫非直天狗也或又此國

の人天狗ハ鴉なりと思習はせり

故依情執鴉と現するか機

の不同なるへしと可答申

さてかれは花嚴等の經の説

相にまかせて未發赤心の行者

修佛道或遇邪師或由邪思惟

五相成身の月隱憍慢之雲一

心三觀之花亂邪見之風何不

墮魔界耶但暫雖成魔終得

果と云或ハ冥資三密終成佛果と

述るか故に魔界に墮せむこと

徒に不可思議難と如此答申者

兩條共に不可成別の疑難所

以無遇

——第十七紙

如此發心しぬれば面々の天狗ともみな本所學の法によりて精進に修行してゆしく得脫をそとけゝる或天狗身を

すて、十方の淨土に往生し或無縁の慈悲をおこして長劫の修行におもむき或みな大日の勅を承て外部の天衆となれり

第十八紙

胎藏界にては第四重の曼荼羅釋迦眷屬の聖衆なり魔界の能因の業は憍慢我執の心なり然慢はこれ慢清淨菩薩とあらはれて十七尊の隨一なり我は無我の中の大我常一主宰の義なれ

は法界において自在を得たり常樂我淨の中には我波羅密これなりされはにや依正不二のゆへに愛宕護にては己心の月輪寺をひらき葛木にては本有金剛山の峯にのほり大峯にては修生の

大日の嶽をあらはし四明の嶺にては四智圓明をさとり三井寺にては三諦の妙理をさとり高野山にては高峯觀を成就し醍醐寺にては祕藏の甘露をなむ春日山にては遍照の日輪くもりなく東大寺にては周遍法界の大佛を顯現す又如來更轉方便則成毘盧舍那といひて此魔界の身を轉して毘盧の色身を成し或天狗の身をあらためずして則法界をひらく魔界種となりといへとも十界を不出十界具足南名圓佛なれば魔界

第十九紙

或又云故ニ圓實教稱性ニ而談魔界如佛界如一如無二如故得魔の外ニ無佛と外ニ無魔といへり又云若於魔佛とは起勝劣の心を自是邪思殊非正觀と判せり或云涅槃心は得やすく差別者は難得といへり又云佛法を得ことはかたきにあらず邪路に入ことをかたしとすと云へりあきらかにしりぬ魔界の色心しかなからこれ毘盧遮那の境界なりと云事をいはむや祕密上乘の心にておもへは金剛界にては伊舍那天これ魔界の上衆として自證の成道の處則第四禪魔醯首羅宮魔王の住所なり如來常應の處この宮にあらずと云事なければ一切の魔所は則實報淨光の宮密嚴花藏の城也抑天狗と云は天は光明の義自在の義これすなはち佛界を表す狗と云は癡闇の義不自在の義生界を示すこゝにしりぬ生佛不二のゆへに天狗といひけるにや又天と云は天曼荼羅是金剛界也狗と云は地曼荼羅即胎藏界也かるかゆへに兩部不二なれば天狗とも號せり此則事而眞の法門をさとりてもろゝの天狗みな成佛得脱しけるとなむ

第二十紙

則佛界の一德にあらずや大圓覺修多羅了義經云地獄天宮皆爲淨土有性無性齊成佛道